

令和 元 年 7 月 31 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 平成 29 年度

受付番号 102

氏 名

長沼 秀幸

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地： アルマトゥ市 （国名： カザフスタン共和国 ）

2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。

ロシア帝国のカザフ草原統治体制再編（1830-60 年代）

3. 派遣期間：平成 29 年 5 月 30 日 ～ 令和 元年 5 月 29 日

4. 受入機関名及び部局名

アル・ファーラービー名称カザフ国立大学5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意（A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可）**

(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)

(注)「6. 研究発表」以降については様式 10-別紙 1~4 に記入の上、併せて提出すること。

○研究内容

派遣期間中は、「ロシア帝国のカザフ草原統治体制再編（1830-60 年代）」という研究テーマのもと、カザフスタン共和国アルマトゥ市を拠点に研究を進めた。本研究が主に扱うのは、1820 年代に導入された、カザフ草原（現代のカザフスタン共和国の領域に相当する歴史的地理概念）におけるロシア帝国の統治体制が、その後どのように再編されていったのかという問題である。より具体的には、同地域がロシア帝国の直轄統治下に入る 1860 年代までの間に、1820 年代の統治体制が、帝国権力と現地勢力との間の相互作用を経て、いかなるプロセスで再編されていったのかという問題を考察した。

本研究が対象とする 1830-60 年代は、ロシア帝国の国境線が段階的に南下していく時期である。本研究では、この国境線の南下過程と統治体制の再編を結びつけて考察した。本研究で使用する「国境（ロシア語：granitsa）」という言葉は、国家同士を分かつ現代的な意味での国境ではなく、当該時期の史料の用法に従い、ロシア（またはロシア人）と「それ以外」を峻別する境界線を意味している。1820 年代以前、その国境線は、ウラル川沿いに形成されたオレンブルグ要塞線、およびイルティシュ川沿いに形成されたイルティシュ要塞線であった。研究史上、19 世紀を通してこの国境線が南下していったという現象自体は漠然と多くの研究者が共有しているが、ある時期において帝国が想定していた国境線が草原内のどこにあるのかといった問題、またその線が具体的にどのようなプロセスで南下していったのかといった問題に関しては、未解明のままである。したがって、北側に位置するロシア帝国から見た時に、それらの要塞線の外側に存在するカザフを帝国の「内」に取り込む過程と、その「内」と「外」の境界線を見極める作業は、1830 年代以降のロシア帝国による草原の併合過程の全容を再検証するという意義を有している。

本研究は、1830 年代以前におけるロシアの統治体制の形成過程という問題と密接に関係している。ロシア帝国のカザフ草原進出が本格化した 1820 年代に帝国の国境は南下を開始したが、そうした動きに対する現地住民の反応には協力と反発の二種類があった。このうち前者に関しては近年の諸研究が焦点を当てているところであるが、後者の代表例である反乱に関しては、それがロシアのカザフ統治にいかなる影響を与えたのかという観点から本格的な検討がなされていないのが現状である。

そこで本研究では、時代の上限をケネサル反乱（1837-47年にカザフ草原全体を席卷した反乱。ケネサル・カシモフという反乱を主導した人物の名前に由来する）が展開した1830-40年代に設定し、反乱の展開と草原統治の連関を整理するところから議論を始めた。帝国の国境は、そうした反乱の中にあっても、要塞の建設や草原東部における外管区（ロシアがカザフを管理するために1820年代から導入した行政区画）の増設といったかたちで南下し続けた。そして、帝国には、それらの新しい進出先にて在地のエリート層と新たに関係構築を図る必要があった。加えて、それまで帝国と関係を結んでいたカザフ人の多くが反乱中に逃散し、それ以前に統治体制を築いていた地域に関しても、帝国は新たなカザフ人協力者を獲得する必要に迫られた。本研究は、反乱中および反乱後のカザフ草原における、帝国のこれら「新規」在地エリート層との関係のとり結び方を統治体制の再編ととらえる。そして、国境線の南下に伴う、帝国が自らの「外」を「内」に包摂していく過程を分析することで、統治体制再編の展開を明らかにすることを目指した。これらの諸問題を研究するために、筆者の派遣期間中は、アルマトゥ市にあるカザフスタン共和国中央国立文書館に所蔵されている、本研究テーマに関連する歴史資料の収集を多く行った。そして、それらから得た情報やデータをもとに、以下に述べる研究内容に取り組んだ。

帝国の統治体制再編の過程を明らかにするために、本研究が行う具体的な作業は、①ケネサル反乱の過程で変動した部族構成・分布の整理、および②新規行政制度の導入に伴いロシアが設定した境界線の設置・変更・廃合の過程の分析、以上二点である。具体的に述べると、①については、統計的な情報が記載されている行政文書から、首領層を中心に、個人が属している遊牧集団の名称や個々の遊牧地、そして彼らの親族関係などを整理し、その分布状態を整理した。この作業の必要性は、ケネサル反乱の過程で大規模な人口移動が起こり、部族構成といった草原社会の既存の秩序が大きく変容した点に求められる。

②については、境界線（要塞線や、各行政単位の外縁を形成する行政区画線）の設置・変更・廃合に関するロシア側の構想を分析した。いつ・どこに・どのような目的で境界線を設置したのかという問題を考察することが、各段階における「内」と「外」の境界線に関する帝国の認識を探る手がかりになると考えられるからである。この作業は、いかなる動機に基づいて更なる国境線の南下が必要と考えられたのか（または考えられなかったのか）ということを明らかにすることにも直結し、草原併合の動態を鮮明に描き出せると考えられる。そして、筆者のこれまでの研究から得られた、境界線設置の地理的基準や管理体制に関する知見と併せて、より包括的な次元の議論を試みた。

○研究成果と課題

上記の研究内容①「ケネサル反乱の過程で変動した部族構成・分布の整理」に関しては、主な作業地である中央国立文書館に多くの史料が保管されており、大きく研究は進展した。その成果は、筆者が主催者となって組織した国際ワークショップ、“Wars and Transformation of Social Order: Russia’s Conquest of Central Asia and the Caucasus”（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2017年12月6日）において、“Kenesary Revolt and its Consequences, 1837-1868: Reconfiguration of Kazakh Society and Russian Rule”という題目の研究報告を行った。本報告では、まず、1830-40年代にカザフ草原において確認できる人口変動が、ケネサル反乱と連動していたという点を史料の分析から指摘した。そして、反乱が終息した47年以降に導入された新たな統治体制が、反乱の過程で起きた人口変動と対応していたという事実を明らかにした。ただし、本報告で主な検討対象としたのは、ケネサル反乱の中心地域のみであり、カザフ草原全体における人口変動と統治体制再編の連関を検討できたわけではなかった。これは、上記の公文書館に収蔵されている関連史料が想定以上の量であったため、収集・分析が追いつかなかったことが主な理由である。そのため、史料収集の継続は優先すべき今後の課題の一つである。そうした作業が完了したのち、カザフ草原全体における部族構成や分布の変動を包括的に整理し、本トピックに関する研究成果を論文という形で公表することを目指す。

上記の研究内容②「ロシアが設定した境界線の設置・変更・廃合の過程の分析」に関しても、研究は進展した。その成果は、ヨーロッパにおける中央アジア研究の拠点学会である European Society for Central Asian Studies と、アメリカにおける中央ユーラシア研究の拠点学会である Central Eurasian Studies Society の合同大会において、“The Transition of Russia’s Perception about the Borderline over the Kazakh Steppe, 1820s-1860s”という題目で口頭報告を行った（中央アジア・アメリカ大学、ビシュケク、7月1日）。本報告では、国境線に関するロシアの認識の変化について検討した。ロシアは、国家同士の交渉によって確定する境界線のみを国境線ととらえていたわけではなく、自らがカザフ草原に導入した領域的な行政区画の外縁を国境線と認識することもあった。そして、この行政単位の規模や数を拡大させていくことによって、カザフ草原を徐々に併合していったという点を指摘した。ただし、本報告で主な検討対象としたのはカザフ草原東部であり、西部については未検討にとどめた。その理由は、十分に検討できるだけの史料が不足していたからであった。この研究テーマにつ

いても、史料収集を継続し、より包括的な議論および論文としての成果公表は今後の課題としたい。

○その他

海外特別研究員としての所期の研究テーマとは異なるが、密接に関連する内容についてもいくつかの研究成果があがった。まずは、日本語で執筆した二つの論文、長沼秀幸「19世紀初頭カザフのハンに対するロシア帝国の政策：中ジュズにおけるハン並立体制の分析を中心に」（『日本中央アジア学会報』13号、pp. 1-24、2017年）と長沼秀幸「カザフ草原西部におけるロシア帝国の統治の協力者（一七八四―一八二四年）」（『ロシア史研究』100号、pp. 166-190、2017年）である。両論考は、筆者が海外特別研究員に採用される以前に行っていた研究テーマの成果である。時代的には1830年代以前を扱っているが、1830年代以降の統治体制の再編過程を検討する上で、それ以前の時代の統治体制の特徴を踏まえておくことは不可欠な作業である。このため、これ以前に筆者が所持していた史料に加えて、カザフスタン共和国中央国立文書館に所蔵されているものも適宜利用し、18世紀末から19世紀初頭にかけてのロシアのカザフ支配に関する論考を執筆した。同様に、1830年以前のロシアのカザフ統治に関して、先述の学会 Central Eurasian Studies Society の年次大会にて、“Russia’s Politics toward the Kazakh Khans in the Early 19th Century: ‘Divide et Impera’ Paradigm Revisited”という題目で口頭報告を行った（ワシントン大学、シアトル、2017年10月7日）。加えて、日本西洋史学会においても「19世紀初頭ロシア帝国のカザフ統治におけるハン制廃止の意義：中央政府・オレンブルグ当局・シベリア当局の視点を中心に」（広島大学、2018年5月21日）というタイトルで口頭報告を行った。

次に、Hideyuki Naganuma, “Russko-kirgizskie (kazakhskie) vzaimosvizi v tvorchestve A. S. Pushkina (po povesti Kapitanskaja dochka),” In Pushkin, Rossiia, Orenburg: dvizhenie vo vremeni, Orenburg: Izdatel’skii tsentr OGAU, pp. 60-65, 2017. (ロシア語原語：Русско-казахские взаимосвязи в творчестве А.С. Пушкина (по повести «Капитанская дочка») // Пушкин, Россия, Оренбург: движение во времени. Оренбург: Издательский центр ОГАУ. С. 60 - 65. 2017)と長沼秀幸「(日本語書評) Dmitrii V. Vasil’ev, Rossiia i Kazakhskaja step’: administrativnaia politika i status okrainy (XVIII-pervaia polovina XIX veka) (Moscow: ROSSPEN, 2014) (ロシア語原語：Васильев Д. В.: Россия и Казахская степь: административная политика и статус окраины (XVIII-первая половина XIX века)」（『ロシア史研究』99号、pp. 62-67、2017年）の二つの依頼原稿も執筆した。前者はロシア語によるものである。これは、筆者が2016年にロシア連邦オレンブルグ市に短期滞在していた際に現地での受け入れ教員をお願いした先生からの依頼であった。もう一方の書評は、筆者が所属している、日本におけるロシア史研究の拠点学会であるロシア史研究会からの依頼であった。書評対象となった書籍はロシア語のものであるが、18世紀後半から19世紀後半までのロシアのカザフ統治を扱っており、海外特別研究員としての研究課題と密接に関連しているものである。

最後に、2018年3月にキルギス共和国ビシュケク市にて開催された国際会議 International Workshop “Istoriia Kyrgyzstana v issledovaniiakh iaponskikh uchenykh (ロシア語原語：История Кыргызстана в исследованиях японских ученых)”にて招待講演を行った。これは、同国の歴史研究を専門としている秋山徹先生（早稲田大学、准教授）と現地の研究者が共同で主催した会議である。筆者は、“Iaponskaia istoriografiia po izucheniiu Tsentral’noi Azii (ロシア語原語：Японская историография по изучению Центральной Азии)”という題目で、日本における中央アジア研究の概況について講演した。